

【特別寄稿】

なぜオランダは“NO”と投票したのか

—古い欧州における新しい欧州懐疑論の解剖学—

ルネ・キュペルス

ウィアルディ・ベックマン財団、オランダ労働党

翻訳 高安健将（北海道大学大学院法学研究科専任講師）

現在のEUは、盲目的にスピードを増している列車のようなものである。つい先頃、10両の新しい客車とその列車に連結した。さらに新しい客車が加えられるのかどうか、またもしそうだとし、さらにいくつの客車が加えられるのかははっきりとしない。オランダ人乗客たちは、このことが列車全体の安定性に影響するのかどうかを訝っている。混乱が車中に行き渡っている。誰も列車の正確なルートを知らないようであり、列車は奇妙で見慣れない駅をいくつも通過し、最終的な行き先についても謎のままである。乗客のなかに他の乗客よりも乗車券に多くを支払わなければならない者たちがいたという事実は、大きな苛立ちの原因である。そして人生においてあまりにしばしばそうであるように、言いたいことを最も多く率直に言う乗客が、取引の最良の分け前を得ている。

フランス大統領にどことなく似ている車掌が列車のパトロールをしている。時折、彼は、新しい規制と新しい価格を備えた新しい列車時刻表を乗客たちにちらりと見せる。それは判読しにくい理解不可能な「電話帳」のように見え、条項や外交儀礼で満ちており、曖昧で解釈の余地を与えるもので、乗客の間に概して憤りと不信を引き起こしている。

列車は噂で一杯である。一見したところ、乗客は下車することを許されないように見える。人々は

二度と自分たちの家を見ることがないのかもしれない。懸念とパニックが野火のように広がっている。フランス人とオランダ人の乗客たちは全く途方に暮れて、非常通報の線を引いたのである。休憩をとる時なのだ。立ち止まり、列車のスピードや進路方向、長さについてよく検討してみる時なのだ。旅路は、依然として思考を広げ正当化できるものなのだろうか、それとも深刻な危険を生み出し始めているのであろうか。

● 誇大妄想

これは古い欧州における新しい欧州懐疑論の完璧な例証である。オランダがEU憲法を国民投票で“NO”とした週に、私はプラハでの会議でこの急行列車の隠喩を述べた。プラハに本拠地を置く欧州政策研究所（EUROPEUM）とドイツのフリードリヒ・エーベルト財団が抜群のタイミングで、「フランスとオランダにおけるEU憲法をめぐる国民投票に関する省察—欧州にとっての教訓」と題する会議を組織していた。パスカル・ラミー前欧州委員会委員（現世界貿易機関事務局長）は、フランスのEU憲法に対する“NO”を説明する基調講演者の役を務めた。相当に注意を払いつつも、ラミーが認めたのは、多くの人々が欧州に対して距離を感じており、

EUが今やそうとなった複雑な制度的建造物には、いかなる程度の愛情をも喚起することが難しくなっているとわかりつつあるということであった。「巨大な市場に恋することは簡単ではない」、これが彼のフランス語の演説に対する私の英語-チェコ語訳の表現であった。ラミーによれば、フランスとオランダでのレファレンダムの結果には2つの次元がある（「地震の影響を評価することは難しい」）。すなわち、国の次元と欧州の次元である。しかし、窮屈なブリュッセル合意に沿って、彼の立場は、批准のプロセスは是が非でも継続されるべきであるというものであった。

如才ない人間として、この問題に対する私の反応は、それほど慎重なものではなかった。私は、全ての国、全ての国民に、欧州とEU憲法についての真剣な討論と独立した見解を喜んで認めるであろうが、私にはすでに「死んだと宣言された」文書に関するレファレンダムに人々を参加させるのはいくぶん、残酷なように思われる。批准プロセスを不親切にも継続することは、EU憲法の生存可能性に深刻な疑念があるという単純な事実によって、控えめに言っても問題がある。私が考えるに、EU官僚からのこうした反応（こうした発言は6月の欧州理事会の会議前にさかのぼる）こそが、欧州統合を目指す大事業（the European Project）に対し、フランスとオランダでEU憲法を拒否した人々の主要な反対をはっきりと裏付けている。こうした反応は、すなわち、あなた方が何をし、何を言おうと、人びとの意見がどのようなものであろうと、「ショーは続かなければならない」し、欧州統合という車輪は回り続けなければならないということであった。

オランダの“NO”という投票結果が、欧州の拡大に対する遅ればせながらの反対であるという印象を払拭しようと試みる際に、私はもっと外交的で丁寧であった（それも自分の言葉に完全には嘘をつかずに、である）。このレファレンダムの揺るぎない結果には、もちろん、あらゆる類の解釈の余地があるのだが、これがポスト共産主義諸国に対する遡及

的な拒否であるとはみなされるべきではない。よく理解できる場所であるが、これはブラハの人びとには心配な点であった。しかし私は彼らを安心させるべく最大限の努力を払った。私が出口調査結果から持っている情報によれば、EUの拡大は、レファレンダムでの否決という結果に対しては明示的な役割を果たしてはいない。EU拡大は確かに、今日のより規模の大きい希釈化されたEUにあっては、オランダのような国は、その影響力とアイデンティティを喪う喫緊の危険にさらされているとする優勢的な感情に対しては間接的な影響があろう。しかしEU憲法の否決は、欧州統合そのものに対する激しい反対ではないし、チェコ共和国やハンガリー、リトアニアといった国々に対する拒絶でもない。私が思うに、（ウルクの人びとを含めて）オランダ人の大多数は依然として、鉄のカーテンの開かれたあとに欧州の分断が解消したことは、予め運命づけられた歴史的出来事であると考えている。

その後、欧州ならびに国レベルの政策形成に責任をもつ人びとが、（ビッグ・バンや腐敗したルーマニア人、アンカラに対する拙速な約束事、ポーランド配管工による豊かさのギャップの利用といった鍵となる言葉を含む）絶望的で誇大妄想の拡大主義的政策に着手し、（欧州市民権、欧州大統領、憲法といった）欧州超国家への動きを装うことで、それまでに得ていた支持を失う危険にさらされているという事実は、全く別の話である。

● 欧州というチーズ・カバーは 木端微塵に砕かれた

オランダはEC「創設の父」であり、かつてはあまりに原理的に親欧州統合的であったが、はっきりとそして本当にそのブリュッセルの土台から落ちてしまっている。鍵となる問いのひとつは、オランダの政治システムの（とりわけ欧州政治との関連で）帝国主義的でエリート的な性格が、かなりの長い間、欧州懐疑論の底流を実際には隠してきたのかどう

か、あるいはこの新しい欧州懐疑論的な感情が、この10年の間の欧州統合の大事業による激しい加速の結果であるのかどうかということである。当初から欧州統合に関して現実主義者であるNRC-Handelsblad紙のコメンテーターであるJ. L. ヘルドリングは、痛烈な判断を下している。「この国で欧州統合の理念の正しさは言うに及ばず、その実現可能性をあえて問うものには誰でも、良くて優越的あるいは哀れんだ笑みを浮かべられて迎えられ、悪ければ敵意をもって扱われると予想できた。欧州統合は信仰の問題であって、疑いの余地はなかった。何年にもわたって、欧州に関する全ての論議は改宗者のサークルのなかで行われていた。このサークルの範囲外ではほとんど議論されなかったのである。しかし今やこの禁は取り払われ、我々は大部分、非合理的な反応に直面している。これは予想されたことであった。にもかかわらず、多くの賛成派活動家たちは、光を見ようとしないうる無知な人民に対する非寛容をほとんど隠すことができなかつた」。

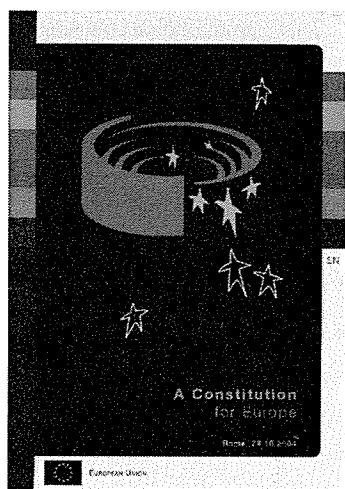
それではなぜ、かくも多くの人びとが反対に票を投じたのだろうか。この「反エスタブリッシュメントの地滑りの勝利」の背景にある動機は何だったのだろうか。これこそが、あらゆる「主流の」諸政党や（メディア、社会パートナー、環境運動といった）さらに大きなオランダの「市民社会」の助言に反して、EU憲法に対しオランダ人が大規模に拒絶したことへのおそらくはもっともよい表現の仕方であろう。重要度にしたがって言えば、反対票の主な理由は、

- オランダはEUに対しあまりに多く支出している
- オランダ人は自国のコントロールを失っている
- 他国に比してあまりに小さな影響力しか有していない
- オランダはアイデンティティを喪失しかかっている
- オランダはEUに対して過剰に依存している
- 情報提供が乏しい

- 官僚組織の増大のせいである
- ユーロの負の効果のせいである
- 我々は外国人に仕事を奪われている
- EUは利得よりも不利なことが多い

本当に驚くべきことは、投票の仕方を決定する際に、人びとの主要な動機付けが、主に欧州統合自体、そしてEU内におけるオランダの位置と立場によっていたということである。人びとは、少なくとも明示的には、あまりにひどく不人気なバルケネンデ政権に焦点を合わせることはしなかつたのである。また、人びとは、その恐怖と威嚇のキャンペーンについて政府を罰したのでもなかつた。そのキャンペーンも、EU憲法支持のキャンペーンというよりも反対派をめぐらせたキャンペーンであった。そうではないのだ。レファレンダムは本当に全て欧州問題についてであった。あるいはさらに特定すれば、欧州問題そのものだったのだ。

以前にも言われたことがある。このレファレンダムが過去50年で、欧州懐疑論者や欧州不可知論者そして統合過程の現状と方向性に疑念を持つ人びとが、欧州というテーマについて自らの考えを語る最初の機会を提供したのである。EU憲法をめぐるレファレンダムは、欧州統合の一括契約全体、そして人びとがEU全般に対して持っている見解をめぐるレファレンダムとなった（そしてそれは、私の見解では、非論理的であるということはない）。およそ50年で初めて、人びとは今、欧州統合についての意見を聞かれたのである。以前には、欧州統合はエリートの玩具だったのであり、それは超政治であり、ポリティケル・ポリティク（Politikerpolitik）とドイツ人が呼ぶものであった。つまり、政治家のための政治であって、一般市民のためのものではなかつた。EU憲法をめぐるレファレンダムによって、そしてレファレンダムはまさにこうした目的のために考案されたのだが、欧州統合の大事業と人びとの間のギャップを狭めることがもくろみであった（たとえば、ラーケン・サミットや欧州の将来像に関する



EU が作成した EU 憲法パンフレット

る諮問会議 Convention がそうである)。しかしその代わりに、EU 憲法とレファレンダムは、このギャップが現実であることを証明してしまった。欧州官僚たちは賭けに出て、敗れたのである。

ヘルドリングとは違い、私は大量の反対票が基本的に非合理的な反応であるとはみなしていない（自ら公言する反対派として、私としては他には主張のしようがないが）。私は次のことは認めなければならない。レファレンダムをめぐる討論は活発ではあったが、啓蒙的では特になかったことは否定できないのであり（EU 憲法に関するオランダのいい本はみな、どこへ行ってしまったのだろうか）、憲法自体のテキストに集中することはほとんどなかった。討論は憲法の本質をめぐって行われ、多くの人びとがいかに欧州の統合過程の神秘主義のなかで十分に知識・経験をもたないかもしれないとはいえ、彼らは疑いなくこの憲法に関して欧州官僚がやり過ぎたという事実を非常に意識していた。煙幕を張り（イエロー・カードや市民イニシアティブといった）憲法のなかのしたたかなからくりを作ることで、懸念をもつ批判派の心配を和らげるための隠された努力にもかかわらず、この憲法問題の真の目的は、常に単に委任を受けることだけであった。その委任は、過去10年の猛烈なペースを含め、欧州統合の

大事業全体のための遡及的な権力を構成し、米国や中国と政治的・経済的に互角となる強力な欧州の権力を創出するのに必要な推進力を提供することになっていたであろう。ジスカール・デスタン、アマト、デハーネの連邦主義者トリオは、一層硬く結ばれた欧州合衆国へ向けた象徴的な地歩以上のものを設定する意識的な努力の一貫として、憲法草案やフランス的な大統領の外観、欧州市民権を国民国家に並存する正統化の手段として使ったのである。

欧州の将来像に関する諮問会議への英国版内部告発者であるジゼラ・スチュアートを証言者としてみよう。彼女は次のように書いている。「諮問会議での私の経験からすると、憲法を求める真の理由は—そしてその主要な効果は—EU の政治的深化であることは明らかである。」英国における新欧州派である元欧州担当大臣のデニス・マックシェーンもまた最近、大変に印象的な見解を示している。EU 憲法に対する拒絶はひとつのことを臆面も無くはっきりさせている。今やきっぱりと、欧州超国家には終止符を打たなければならない。欧州連邦は過去のものである。我々が現在の国民国家に代わるものをもたないことは、今や万人に明らかである。

個人的には、オランダの拒否はヒステリックで狂気の、統制の効かない非合理的な拒否などでは少しもなかったと私は確信している。思うに、「オラ

「ランダの反乱」は、長く延び延びになっていた欧州に対するランダの姿勢の正常化である。このレファレンダムを装って、ランダは最後にその本当の旗色を示したのである。欧州統合の過程を通して、我々はあまりにも親欧州的でありすぎた。ランダは人工的な親欧州派であった。欧州に関して言えば、我々は長く自らの分際を忘れて生きてきたのであり、したがってその行動を修正する必要を常に感じてきた。ランダが「親欧州的であったのは」聖なる創設の6カ国のひとつだったからである。依然として戦争の傷を負っている小国であったランダが、大国と一緒に平和と繁栄について語るテーブルの席に着くことを許されたからである。我々が提供できる石炭と鉄鋼ののではなく、むしろ後の段階で農業に貢献するだろうと思ったからである。

レファレンダムによって、ランダの欧州に対する立場は、「北西部的な欧州化」を遂げた。ポール・ボルデウィジク (Paul Bordewijk) とロナルド・プラスターク (Ronald Plasterk) がすでに示唆しているように、我々は今や、英国やデンマークそしてその他のスカンジナビア諸国と同じ陣営にいる。我々は、大きな身振り、力強い言葉、大規模な事業に対して同じ実用主義的で冷静な見解を共有している。

ランダは集権的な帝国に対する反乱という観点からすれば、その歴史的なルーツを再発見しているとさえ言うことができる。ブリュッセルのベルレモン・ビルをフェリペ二世のエスコリアルに喩えて。馬鹿げているだろうか。私が思うに、デモクラシーや人権、「ナショナリズム」の感情についての心配に根ざして、少なくとも4億5千万人を包摂する帝国の萌芽に対し人びとが不信を抱くのは全く正統で明白なことである。EUのように特異な国家を超える超建造物の形成が、デモクラシーや法の支配、有効な政治という観点から歴史的な進歩を示していると主張する際の立証責任は、より大きくより強力な欧州を唱える人々の側に依然としてある。

● オランダから見るEUの主要な問題 とはどのようなものなのであろうか。

〈欧州の裏切り〉

欧州統合をめぐるプロパガンダの筋書きは、EUが仮借のない無制限のグローバル化の過程に対する対案であり、欧州諸社会によるさらなる米国化への対抗だというものである。しかしそれよりも、人びとは欧州をグローバル化過程の送信機ないしは加速器とさえみなしている。EUは、破壊的で混乱を招くグローバル化と自由化に対する盾あるいは濾過器となる代わりに、(その内部市場の力学と社会的文化的な「付帯的危険」により) (社会や経済における異なる集団やアクターに対して分極化し互いに異なる帰結をもたらす) アングロサクソン型のグローバル化の代理人として働いている。EUはグローバル化の胸の悪くなる顔である。(エネルギー市場、公共交通機関、住宅といった) 公共部門に対する自由化政策を例に取ってみよう。EUとEU裁判所のとるデジタル市場国家アプローチ (digital market-state-approach) は、強力な市民社会をもつ、ランダの古典的な公共と民間の混合的配置を害している。EUが「欧州社会モデル」を擁護するであろうとの信頼感はない。

〈EU一均一化の剃刀〉

EUは、豊かな欧州の多様性がその下で栄える傘とはなっていないようであり、色とりどりの多様性と相違に対する尊重をあまり持ち合わせず、かえって加盟国や国々の文化、伝統、社会を均一化する剃刀として作用しているようである (たとえば、欧州はスペインの闘牛、プティリョネ、ハイダーに反対している)。これが、その指令をもって新しいレヴァイアサン、つまり新しい超国家となっているブリュッセルに対する感情である。

欧州の規制機構が慎重さやつましさを欠いていることは、時には国、地域 (region)、地方の慣習に

対する深刻な帰結をもたらす。それは欧州の規制（指令集 directories）による浸透と介入ということである。補完性の原理についてはレトリックによる多くの話があり、欧州が国境をまたぐ争点や問題に自己限定しているという偽りがあるが、ブリュッセルにおける日々の本当の世界が示しているのは別の方向である。すなわち、欧州裁判所による司法化（juridification）が深いテクノクラティックな均一化と浸透する効果をもっており、また、内部市場についての同一程度のグラウンドという論理も同様である。（欧州はテロリズム、犯罪、移民、環境汚染といった国境横断的な問題に自己限定しているという）プロバガンダと、ブリュッセルにおける日々のテクノクラティックな現実との間の溝が欧州に対する懐疑的な感情をあおっている。

〈欧州の将来の方向性、アイデンティティ、規模に対する不安〉

あらゆる次元において欧州は無限で限界がなく境界がない（特異な事業である）という事実は、それ自体不安と不満を引き起こしている。EUが決定論的な片道としてのみ提示されているのだから尚更である。欧州がさらに一層の統合へと向かう以外には他に道はない。経済的にも地政学的にも新しい世界秩序が、中国やインド、米国に対抗する強力な欧州ブロックの形成へと駆り立てている。代替案はない（欧州版TINAである）。国民国家は終焉を迎えており、それはあまりに弱いプレーヤーであって、生き残ることはできない。福祉国家改革や大量の移民のゆえに流動的で不安定な社会のなかに生きる人々にとって、これは大変に脅迫的なメッセージである。そうした社会のなかにあっては、国のアイデンティティが最後の安息地のひとつなのである。脱国家的でコスモポリタンなエリートたちは、すでにとてつもなく脆弱な（フランス、ドイツ、オランダ、英国といった「かつての敵」同士の連合である）EUの一体性に対する潜在的に破壊的な効果を考慮に入れることなしに、さらなる拡大について不用意に口に

している。

専門家たち（特に外交政策専門家たち）は、30ないし35カ国への更なる拡大を支持するのに、地政学的な議論しか使わない。しかし欧州統合の大事業全体にとっての影響はどうなのだろうか。EUは貿易障壁のない、単なる自由貿易地域になるのだろうか。それとも、地球規模の舞台で首尾一貫したアクターとして、凝集性と共通のアイデンティティをもつ政治的な連合体になるのだろうか。限界はこの両方の概念にある。政治的野心と拡大に関してである。

古い欧州における新しい欧州懐疑論はEU全体についての懐疑論では必ずしもない。大半の人びとは依然として欧州の統合と協力の形態を好んでいる。人々は福祉政策や人権に関する欧州モデルを支持している。しかし、ビッグ・バン、為替相場メカニズム、大統領制、専門技術的な規制、ルーマニアに至る無責任な拡大、不均衡な新自由主義的市場中心アプローチ、トルコに対する不人気な約束など、近年の欧州統合への無謀な加速に対して人びとは心配している。そして、各国の文化や伝統に対する尊重の欠如、情報をもたない一般の人びとへの尊重の欠如を心配している。

さらにはもっとある。見かけはあてにならないが、フランスとオランダの拒否以前には、欧州における全ての兆候は、より大きな統一、権力の増大、より集権的なコントロールの方向を指し示していた。間違いなく、「超国家」に向けた秘密の怪物的な協定が憲法の影で作られていた。それは、（超自由主義的な）経済学者たちと外交政策戦略家たち、単純素朴な社会主義者たちによる怪物的な協定である。フランスとオランダの拒否に対する「シティ」が先導した金融市場による反応の仕方を見てもよい。突然、耳にしたのは、アナリストたちによる次のような説明である。ドルを補完し競合する健全で信頼できる通貨となるために、ユーロは強力にして密接な政治統合によって支えられる必要がある。明確な税制と国家間の職業移動の自由を伴う強力な硬

く結びついたユーロ市場が必要である。そして続いて、外交政策エリートたちは、世界の舞台で役割を演じる能力のある地政学的な行為者に欧州を転換する手段として拡大の継続を使いたいのである。社会主義者たちは怠慢にも欧州の超医療国家（Super-Healthcare State）を目指し、進歩主義のジレンマで痛い目にあっている。すなわち、どのようにブリュッセルのテクノクラート支配というレヴァイアサンなしに、グローバル化した市場の規律を上品に緩和できるのか、ということである。

未来に対するEU官僚的な見方全体が欧州超国家に意識的無意識的に焦点を合わせている。国民国家は明らかに弱くなりすぎている。国民国家はそれ自体ではこの新しい世界秩序のなかで生き抜いていくことはできない。それゆえに我々は強い欧州ブロックを、すなわち米国、中国、インドの経済的地政学的な力に対抗できる欧州勢力を、形成しなければならない。しかし「強力でしっかりと一体的な欧州」についてのこうした「支配的な物語」こそがまさに、欧州をめぐる言説のなかに国や文化の多様性への尊重の欠如を心配する人びとに大変に大きな懸念を引き起こしているのである。特に、この欧州についての展望が唯一の実践的な道筋であるとする決定論的な提示の仕方についてはそうである。それは欧州レベルでのサッチャー的な威嚇であり、TINAとはすなわち、欧州の拡大以外に「代替案はないThere Is No Alternative」というものである。しかし、より強力な欧州の対価とは何だろうか、そして誰がその対価を支払うと想定されているのだろうか。このより強力な欧州というものは、単なる幻想、単なる地政学的戦略プレーヤーの側での誇大妄想的な夢想ということはありうるのだろうか。

● 未来への展望

欧州憲法を拒否したオランダやフランスの投票者たちを、外国人嫌いの国家主義者として、開かれた社会を恐れる反対者たちとして、未来に直面する

ことを恐れる者たちとして、グローバル化と移民を糾弾する者たちとして切捨てることを望む人びとは（私がここで言及しているのは、De BeusやPelsといったユートピア的な新カント派の人たちである）、完全に焦点を逃している。私は彼らの道徳主義的で国際主義的な理念は共有するが（そして何ゆえに私が反対することがあろうか）、私の考えでは、彼らは人類学的な慎重さ、歴史的な自覚と常識で希釈されるべきである。多くの人びとが自己同一化の最後の綱として、流動的な世界で最後に信用できる指針である国民国家にしがみついているまさにそのときに、コスモポリタンので脱国家的なエリートが、国民国家とアイデンティティを軽率に退けると、潜在的には危険な状況がある。

この種のコスモポリタンのな反応はまた、社会に現在降りかかっている高度に分極的な力を苦勞して否定しており、その力は大変に異なる方法でさまざまな集団に影響を与えている。そうしたコスモポリタンのな反応は、欧州における極めて不安定な社会的文化的そして政治的風潮を否定している。これは右翼的なポピュリズム（そしてより低い程度において左翼的な保護主義）が欧州に広く出現していることに象徴される。全ては、伝統的な諸政党と、現代の欧州社会に見られる新しい社会学的な亀裂線が直面する政治的代表性の危機に関わることである。この新しい社会学的な亀裂線は、オランダとフランス両国のEU憲法をめぐる国民投票の際の投票行動において明確に明らかとなっている（「上級のフランス」対「下級のフランス」）。

この境界線は、二つの対立する集団を規定する。すなわち、一方において革新的ないし自由主義的教育を受けた中産階級と、他方において、過去10年に社会のなかで起きた社会的経済的そして文化的転換についていくことのできない、いわゆる「権威主義的で」教育を受けていない下層階級に、である。ケルスベルゲンとクローウェル（Kersbergen and Krouwel）がこの二つの集団について次のような明快な記述をしている。

「一方は、不安定でもないし心配もない、妥当な保護措置を享受する人びとの集団である。彼らは、市場を進歩のための機会と見ており、欧州の単一化を成功と見なし、多文化社会のうちというよりはそばに住み、強い個人主義的な生活様式をもち、連帯と社会的制御の中心としての地域 (neighbourhood) には関心を持っていない。彼らは完全に安全で守られていると感じており、彼らは、各々の豊かさによって、退化する公共領域と公共サービスとの接触を回避するのに必要な手段を獲得している。彼らは通常は官僚組織をうまく扱い、政府のさまざまな部門に対処できると感じている。彼らは既存の諸政党を民主的なプロセスを形作る正統な組織と見なしているが、しかし彼らの個人的な生活様式にとってそれらの諸政党は完全に無関係であると考えている (中略)。

他方で、将来を恐れ、市場、欧州の拡大、移民の継続と多文化社会、社会インフラの崩壊、近隣との互助と労働者階級地域における連帯の伝統の喪失、経済の国際化、公共領域の安全の不十分さ、そして公共サービスの悪化といったことにより、脅威を感じている人びとがいる。彼らは多文化社会の真っ只中に生きており、かつては生活の一部を形成した社会関係における大変化を経験している。高度の社会的制御を伴った労働者階級地域の単一文化は、多文化的で困窮した地域に道を譲ってしまっている。この集団の人びとは、伝統的な諸政党にはあらゆる信頼をなくしているが、というのも彼らはこれら諸政党を自分たちの利益を代表する組織ではなく、失敗している国家機構の一部であるとはみなしているからである。政府は、対抗勢力ないしは敵であるとみなされている。有権者のなかでこのように怯える不安定な人びとの目からすれば、彼らの抱える全ての問題が外国人の到来に直接に結びついている。外国人の存在によりグローバル化は具体的な現実となり、これに関連する全ての危険 (低賃金労働が消滅し、国のアイデンティティが掘り崩されていること) が擬人化されているのである。

こうした集団は、別名として「未来を抱きしめ

る」人びとと「未来を恐れる」人々と呼ぶことができる。後者の人びとは、新しい世界が彼らには何らの良いことも用意していないと確信しており、「政治エリート」によって裏切られたと感じている人びとである。これらの二つの集団の間の境界線が、社会民主主義を支持する選挙民を真っ二つに分けるものであることから、これは社会民主主義にとって存在に関わる問題を表している。

欧州統合は、この境界線がこれほどはっきりと目に見えるようになる唯一の領域では全くないけれども、欧州統合をエリートの事業そしてデモクラシーと代表性問題の極致として見た場合、回顧的には疑いなくそうなのだが、「不安な大衆」が欧州統合の大事業に対して突然に攻撃することをなぜ選んだのか理解することは難しくない。最近、欧州の冒険は「帝國的な過剰拡張」(一見したところ終わりのない拡大、グローバル化と自由化の過程における高圧的な仲介者としての欧州、加盟国を均一に刈り込んでおくのに使われる大ばさみとしての欧州)の犠牲となっている。これこそが欧州を、そしてこれが本当に肝心な点なのだが、息吹を吹き込まれた解決というよりも脅威にしてきたのである。いかに危険が高そうに見えようとも、EU憲法に対する拒否によって引き起こされた漏電は結果的には欧州統合の大事業に対して健全な影響を与えるのかもしれない。この主張によってもまた、私はプラハで拍手を得たのである。

米国人の著述家ジェレミー・リフキンは最近、述べている。「欧州統合の過程は史上最も奇妙な政治的実験である。それゆえにこの過程について混乱や曖昧さがあるのは当然なのである」。基本的な問題は、EUの官僚的なエスタブリッシュメントが、欧州発展の方向性について再検討し反省する時間も余地も全く与えなかったことである。このこと自体が、欧州統合の大事業を大変に非欧州的なものにしてしている。欧州は知的自己批判と内省の生誕地なのである。■